ISSN 0286-1968

河上肇記念会報

NO. 28

1987・12・20

目次

特集「河上肇と私」I
前川文夫 (1)
曽我まり (4)
上野　晃 (5)
『全集』以後 (四) ……杉原四郎 (7)
中国訳目録稿 (三) ……一海知義 (11)
米浜泰英
記念会会報を読み返して ……(16)
会員通信 ……(20)
『今日の問題』の問題 (3)　編集後記 (19)

特集・河上肇と私Ⅰ

「河上肇と私」

前川文夫

「河上肇と私」というテーマで何か書かねばならぬ羽目になりました。前号の会員通信から察するに、私もその提案者の一人であるかに思われますが、私のもともとの主旨は、何となく、もう少し違ったところにあったように思います。しかし、何はともあれ、会員のみなさまに自己紹介やら、河上肇との関わりやらを述べる機会が与えられたものと思い素直に喜んでおります。

しかし、まず始めにお断りをしておかねばなりません。それは、私は河上肇とは、いかなる意味でも共通点があるようには思えぬということであります。表面的にでも、例えば彼の出生地山口県や、彼の歩んだ学校歴、さらに彼が関わった一切の学校（大学）と全く関係がありませんし、私の親族に河上の教えを受けた者がいるというのでもありません。

彼が獄中生活を終えた昭和十二年が私の生れ年、お孫さんの一人とほぼ同年齢だなあと思ったことがあります。そんな私ですので例え遠くからでも、河上を拝顔する機会などあったはずがありません。大学時代にしても一般教養としてさえ「経済学」というものを学びませんでしたし、マルクス経済学のはしりさえつい近年まで全く解せずにおりました。その上、誰れからともなく伝え聞いていた私の若き日の河上肇像は〝長い間牢屋に繋がれていた怖い人〟で、書店に並んでいる彼の『自叙伝』を見てさえ、一種異様の重苦しい感情におそわれたのを覚えています。

そんな私が、いつごろのことであろう、もう二十年近くも前のことになります。私の勤める学校の図書新聞に載っていた「貧乏物語の思い出」―たしかそんな題であったと思います―という一文を読んだのが、私が河上肇に関心をいだくきっかけとなりました。その文章の

筆者は、当時私が最も尊敬していた先輩教師のお一人で今ではもう記憶も定かでありませんが、「世の中にはどんなに一生懸命に働らいても、その日の生活さえ十分でない人がたくさんいるということ、そしてそれは決してその人達の責任ではないのだ」という意味のことを淡々とした文体で、いわゆる説教調にでもなく、声高に社会構造の欠陥を示そうというものでもなしに書かれていたように記憶しています。筆者の人柄が偲ばれる一文でありましたが、ひがみ根性が強く、社会の不公平に強い関心をいだいていた私には、ずっしりと心に残る事件となりました。早速京都の本屋まで出掛けました。『貧乏物語』を手にむさぼり読んだのを覚えています。

熱のこもった流暢な文章、古典などを巧みに引用して読者を酔わせるかに思われたこの『物語』は私のそれまでの読書歴に新たな一ページを加えました。

「本来、思想穏健で、諸々の面で恵まれた立場にある著者が、あくまで貧しく、弱い立場の人に組みし、社会の矛盾に怒っている」というのが当時の私の読後感でありました。

それ以来、手に入る限りの河上の著書、河上肇に関する入門書、研究書のたぐいを読みあさりました。筑摩書房の著作集が欲しくてたまらず、古本屋巡りをする日が何回もありました。残念なことに全巻揃っては手に入りませんでしたが、近年、後刻版『社会問題研究』を購入することができましたし、岩波の全集も完結しました。私の近年の夏休みなど長期休暇はもっぱらこの全集を読むことにエネルギーの全てを費しております。

今はまだなにも確かなことなど書けませんが、河上肇という人の勤勉さ（それは、学者なら当然などと、簡単に片付けてしまいたくない）、徹底した行動（ものごとをおよそよい加減に済ませようとしない性癖）、そして終生心の根底に古風な道徳をいだき続けたその人柄に私は強くひかれます。私の浅はかな解釈が許されるならば、こうした河上の体質が、世間一般の人には異常と思われる行動に走らせたのであり、福田・小泉ら多くの学者との激しい論争が絶えなかったのも、『自叙伝』での厳しい人間批判も、さらにまた、老後病弱の身でぼう大な漢詩を読み、その方の専門家さえ舌をまくほどの傑作を残しえたのも彼の体質ゆえと私は考えている。

志士にして文人、学者にして求道の人と、人間として最高の評価を得ている一方で、ほめているのか、けなし

ているのか分らぬ大学者・先生方の言い分の真意が那辺にあるのかを私なりにさぐってみたい。そして近き将来星の数ほどもあろう「河上肇研究書」の中に自分も「意味ある」一書を加えたい。そんな野心をいだいている昨今です。

片田舎に住まい、高校教師をして早や二十八年、この十月満五十歳になりました。人生八十年時代を迎えたとは言え、もう峠を越したと考えてよいわが人生ではありますが、「河上研究」に秘かな炎を燃やし続けたいと思っております。今後共会員諸兄姉のよろしきご教示をお願いします。（昭和六十二年　十月二十日　了）

薄ら寒く、小雨煙るあの日、昭和八年十月二十日、獄衣に身をつつみ、深い編み笠をかむせられた河上は一人淋しく小管の門をくぐった。ときに河上満五十五歳の誕生日に当る。いかに世はすさみ、道理の通らなかった当時とは言え、人生の晩年を迎えてのこの試練をだれが正しく表現しえるであろう。

『今日の問題』の問題

朝日新聞、本年八月十九日夕刊「今日の問題」に次のような記事があった。

「〝まだ生きてゐたかといはれ死ぬる春〟とは河上肇の辞世だが、十七日に西ベルリンで九十三歳の生涯を閉じた元ナチス副総統ルドルフ・ヘスも、まさにそれだろう」と。

まことに不愉快千万な記事である。こともあろうに河上肇とその辞世が、この筆者の筆先でナチスのアドルフ・ヘスと同様な問題意識のもとに語られて「今日の問題」とされているのである。

こおゆうことがあっていいことだろうかと私は思う。この記者が前記引用に続いて、どれ程ヘスの生涯についての解説を加えているにしても、私はすでにこの記者の思考や知識をその根本の所で信用する気になれない。ものを考え書くことをする人の決してとってはならない態度・方法がこゝにあると思うからである。（SK生）

「河上肇と私」

曽我まり

河上博士と直接の何のご縁もないのに、ご法宴につらなることが、私の秋の行事の一つになってしまっている。十何年か前に友人達と京都に遊んだとき立寄った法然院の墓地でご夫妻のお墓を見つけ、感激して名刺を入れたのが始まりで、とうとう会員にまでして貰うことになった。その他のかすかな縁の糸は、亡夫が京大出身ということ、法然院の先のお住職の橋本峰雄師が、私の住む神戸の大学の先生であられた時、一回だけ集りに講師としてお招きをしたぐらいのことでしかない。会員などとはおこがましくて、いつも菊一本のお花代としてお送りしていたのが、それではかえって失礼になろうかと、今は名簿の端にのせて頂いている。

娘時代我家にも灰色の表紙に黒い文字の「貧乏物語」があり、わけも解らぬながらに読んだ記憶、五十歳代に博士の日記集を、これはていねいに読了して大いに感激したこともある。秀子夫人の凛々しさ、優しさが、同性としてまことに誇らしくも嬉しくも有難くもあった。博士の高潔で一途な人生も立派だが、夫人の手紙も言葉もまたとなくつつましくかつ力あって美しい。こんど書簡集二冊を求めて、改めて日々心して読ませていただこうと楽しみにしている。

老と呼ばれる年齢になり、夫も先立ち、子供達とも離れ住む一人暮しの日々だが、幸い友人と読書に恵まれている。有難いことだとこの頃しみじみ思う。見る毎に父上に似てこられる若いお住職の、よいお声の読経も、そのあとの短かいがコクのあるご法話も、毎回有難く伺って帰ってくる。お詣りのあとで頂戴する泉仙のお料理も楽しみの一つ。二つのあんぱんも大切に持ち帰ってゆっくりお茶を入れて頂戴する。

河上肇追悼の席に坐してをり闘士らも老いては他愛なく食む　　失礼

「河上肇と私」

上野　晃

日本の敗戦によって第二次世界大戦が終ったとき、私は一六歳でした。

それまでの教育により、男子に生まれた以上天皇のために死ぬのが当り前と思ってきました。

戦後、今まで知らなかった諸々の思想に出会い、よく解らぬながらも、一生懸命にぶつかっていきました。

そのなかで、河上肇の名を知りました。

会社の先輩や、上司に借りた『貧乏物語』『第二貧乏物語』をむさぼり読みましたが、一七歳の私にはよく理解できず、いま思い返してみてもただ読んだということだけしか覚えていません。

翌年、関西大学の二部にはいって、マルクスに関心をもち、夏休みに河上肇の『経済学大綱』に取り組みました。

むつかしい所もありましたが、繰り返し読んでいくうちに面白くなって、遂に最後まで読み終えました。

その後大阪市立大学に入り、DAS KAPITALにぶつかったとき、河上先生の『資本論入門』のお世話になりました。市大では名和統一先生のゼミで、ゼミの連中と先生のお宅にお邪魔したり、一緒に志賀高原などへ旅行したりしましたが、名和先生の口から河上博士のことを聞くことなく終わってしまいました。名和先生ご自身が当時思想上、政治上、いろいろと悩み、ゆれ動いておられたようです。

こうして、私の河上肇との関わりは、経済学者としての先生との関わりから始まりました。

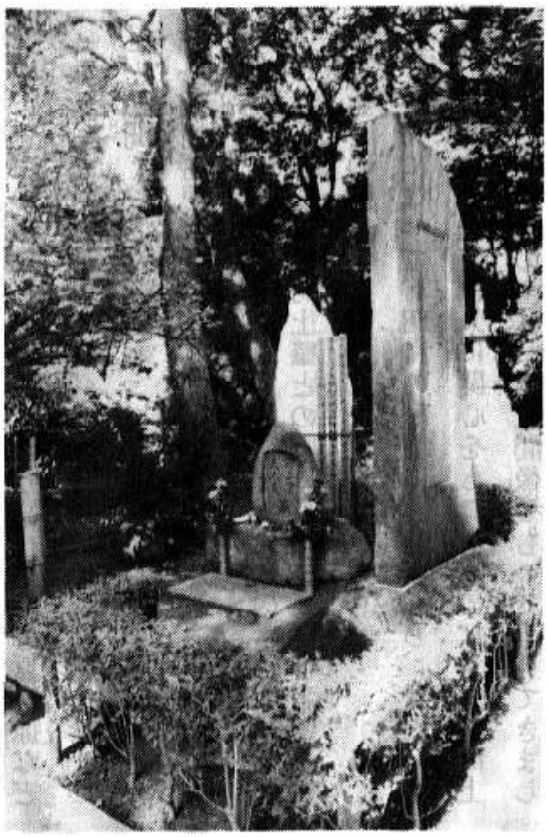
社会人になって、昭和の歴史に関心をもち、また、歴史上の人物や同時代人に関心をもつようになって、河上肇は、その人格の全体、全人間像をもって迫ってきました。とはいっても、私はまだ河上先生の本をあまり読ん

でいません。毎日の仕事と生活がとても忙しくて本が読めないのです。

何年か前、河上肇記念会の方から御連絡を頂き、且つ、杉原四郎先生は私が西宮在住の頃お世話になった方で懐かしく、記念会に入れていただいた次第です。

昨年の立命館での諸先生方のお話に感激し、買って帰った本をむさぼるように読みました。一海先生の河上さんの詩の解説も非常に楽しいものでした。『陸放翁』もそのうちに読みたいと思っています。

河上肇のような大きな人物と同じ時代を生きた、と思うだけでも、自分の人生がなにかしら素晴らしいものに思えてくる今日この頃です。そして、先生が苦闘されたあの嵐の時代を二度と復活させないよう頑張りたいと思います。



前号会報でお知らせしましたように、会員の「河上肇と私」を掲載していきたいと思います。初回のこととて事務局から適宜数名の方に寄稿お願いしました。いただきました三編をここに掲載させていただきます。引き続きどなたでも結構ですので、宜しくお願いいたします。特に締切日は設定しませんが、思い立った時に気軽にお書き下さい。

（一）原稿用紙を使用して下さい。

（二）字数　千字（会報一ページ）または二千字（二ページ）

（三）できれば年代・職業等も書いていただきますとありがたいです。

（事務局　紀平）

『全集』以後(四)

杉原四郎

[一]

前稿で河上肇の八木沢善次あての書簡を紹介したが、その際手ちがいで文章の一部が脱漏したまま印刷されてしまい、折角完全な文面を提供して下さった米浜泰英氏にも一般の読者にも申しわけないことになった。お詫びして、完全な書簡の全文をつぎに掲げることにする。

大正十一年九月二十一日（消印）〔封書〕

大阪市外浜寺町雲雀山　八木沢善次様御祝伺

京都市吉田町　河上　肇　大正十一年九月吉日

拝啓　久しく御無沙汰申上居候処承り候へば御奥様には御女子御安産遊ばされ御子様も御健勝にゐらせられし趣にて大慶至極に奉存候　如何遊ばされ候事やと御噂は致し居りながら御見舞申上候事相怠り居候為御安産の御事今日迄承知仕らず御祝伺申上候事相怠り居候故御海怒被下度候

猶承はり候へば御奥様には御産後の御肥立思はしからずゐらせられ候趣如何様の御経過にて御座候ひしや委しくは承知不仕候へ共折角御静養速に御元気御恢復遊ばされ候やう奉祈候

先は乍延引御祝詞申述度其如此御座候　可祝

大正十一年九月吉日

河上　肇

同　秀

八木沢善次様

同御奥様　御許へ

[二]

去る十月十八日の総会で細迫朝夫氏によって、河上肇の大山郁夫あての、これまで知られていなかった重要な書簡が紹介された。この書簡のことは当日の講演記録にゆずり、ここでは既発表のものではあるが全集には未収録の書簡を三点紹介しておく。

まずは河上肇の住谷悦治あてのものが二通ある。住谷の『河上肇』（人物叢書八五、吉川弘文館、一九六二年）の「あとがき」には、住谷あての河上の二通―葉書と封書と各一通―の全文が写真版で掲げられている。葉書の方は大正十一年四月十八日づけのもので、同志社に勤務するため東京から入洛した住谷が早速河上に面会を申し込んだのに対する返事―ペン書きで八行―で、以下がその全文である。

拝復　私は金曜日の夜分を面会時間に致して居りますから、その時に御光来を願へば一番仕合せます。しかしよく疲労をしてゐたりして金曜日でも来客を辞することもありますので……もしあらかじめ電話で御問合せ下さらば好都合と存じます。餘は拝眉の上申上げる事に致しましやう。　匆々不一

四月十八日

封書の方には住谷から『経済学史』を贈られたことに対する謝辞が書かれている。これは多分住谷の処女作『唯物史観よりみたる経済学史』（弘文堂、一九二六年十月）を指していると思われる。そうだとすると、この手紙の日付は大正十五年十一月十三日ということになる。

拝啓　益々御清栄之御事と慶賀いたします。
さて過日は折角御光来下さいました処不在にて拝眉之栄を不得失礼いたしました。尚其折は貴著「経済学史」御恵投下され有りがたく拝受いたしました。早速御礼可申之処今日まで失礼いたしました。貴著はそのうちゆるゆる拝見いたすつもりで居ります。先は御詫御礼まで。
匆々不一

十一月十三日　　河上　肇

住谷悦治様侍史

毛筆で十九行のこの手紙は、市内吉田二本松の河上から市内同志社大学法学部教授室の住谷あてに出された。

判読しにくい箇所は一海知義氏の御教示にあずかった。記して謝意を表する。

他の一つは河上の伊藤証信あての書簡で、これは柏木隆法の『伊藤証信とその周辺』（不二出版、一九八六年十月）の一三六頁に紹介されているものである。伊藤が明治四三年四月に東京で創刊した『我生活』の第一号を送ってもらったことに対する返事―河上は当時京都に住んでいた―で、おそらく明治四三年四月の何日かに出されたものであろう。全文かどうか不明である。

只今机に向って全紙残らず拝読。最後の徳山だよりを読みて、何故か涙を催し申候。尊兄の御筆にては「親鸞聖人の自然主義」最も面白く拝読、「余が恋愛の経歴」つまらなく読み了へ候、「あづまのぼり」亦面白からず候、貴誌は小生の最親友に送りて購読をすすめ申候。

伊藤と河上との関係が、このような卒直な感想をのべるほどに親密なものであったことをこの書簡はしめしている。柏木の著書は、二人の交友をたどるうえに参考になるところが多い。

〔三〕

『全集』をつかっての新しい河上研究、とくに若い世代による研究がぼつぼつあらわれはじめている。ここではその中からつぎの三つの論文を紹介しておこう。㈠は著者から掲載誌をおくられ、㈡は米浜泰英氏から抜刷をみせていただいた。記して謝意を表する。

㈠荻野富士夫「河上肇の社会主義観 ― 『貧乏物語』以前 ― 」、『初期社会主義研究』（弘隆社）創刊号、一九八六年一〇月。

著者は『全集』第一巻所収の諸種の論稿によって『社会主義評論』以前の河上の社会主義観をうかがった後、『社会主義評論』の論理をたどって、そこにすでに社会主義についての河上の特色ある問題意識が出ていることを指摘する。ついで『日本経済新誌』時代、京大時代、留学とそれ以後という風に河上の社会主義観の推移を『全集』第四～八巻の諸論稿で追求する。この際京大河上文庫所蔵の河上のノート『社会主義論』（一九一一年四月）の内容が紹介され（このノートが紹介されたのははじめて）河上がマルクスの剰余価値説の摂取に向いつつあることが指摘されている点が注目される。

㈡柳沢宏孝「河上肇のメタモルフォーゼ」、『北里大学教養部紀要』第二一号、一九八七年三月。

筆者はここで『資本主義経済学の史的発展』に対する

櫛田民蔵の批判をうけ入れて「新たなる旅」に出る河上のメタモルフォーゼの経過とその意義を、河上の櫛田への書簡（全集続第五巻）などによって考察している。その際筆者が主張している論点は二つある。一つは、「人道主義者として常に批判されてきた河上の、抜き難い道念、情感等は一般に批判しさらべるべきものではない」。なぜならそれこそは河上の魅力であり「社会主義運動に現実的な力を持たせた重要な要素だった」からであるということ、もう一つは、河上はマルクス主義を「通俗化」したことを自己批判し、櫛田や福本もそれを批判しているが、社会主義運動の担い手が労働者階級である以上、「マルクス学のあらゆる面での通俗化は不可欠である……通俗化しないで浸透させ得るなどということは考えられない」から、われわれは通俗化の重要性を社会運動の観点から考え直さねばならないということである。「河上批判からでなく、河上から直接学ばなければならない点は多い」というのが筆者の結論である。

(三)大林道子「戦前の産児調節運動と優生思想」(1)(2)、『助産婦雑誌』（『医学書院』第四一巻第八号、第九号、一九八七年八月、九月。）これはわが国における受胎調節問題の歩みを戦前から戦後へとあとずける筆者の労作の一部で、大林はここで河上肇、馬島僩、山川菊栄、山本宣治、永井潛、古屋芳雄の六人をとりあげている。河上は最初に登場するが、後の五人の叙述の中にも河上がしばしば顧られている。筆者は全集第四巻所収の「人口は滔々として都会に流入す」という一九〇七―八年の論文から一九二七年の『人口問題批判』にいたる河上の人口思想をとりあげ、『批判』における河上の所論は「巨視的で長い将来を展望した視点」は必要であり反論の余地もないが、さりとて鈴木文治の産児制限論をその立場から批判して鈴木を帝国主義者と同一視することはどうかと疑問を投じ、次のようにのべている。「政府が堕胎を取締り、産児調節もその技術の普及を妨害しようとしているなかでは、鈴木文治の『それ（産児制限）がいかぬといふならば、如何にして人口過剰によって日々様々演ぜられつつある社会的悲劇に対するか、の明瞭なる具体的解決策を示して貰いたいものである』との政府への要望は力を以て響くのである」。鈴木のこの政府への要望は河上へのそれでもあったと筆者は考えているのであろう。

中国訳目録稿(三)

一海知義
米浜泰英

『経済科学概論』、小川郷太郎著（薩孟武訳）『租税総論』等を刊行したようである。

初版を北京大学図書館が所蔵する。

7 レーニンの弁証法

デボーリン著　河上肇訳　一九二六（大正一五）年三月二五日、弘文堂書房発行、四六判。序言三頁、目次一頁、本文一一六頁。マルキシズム叢書第一冊。

⑩ 伊里奇底弁証法

任白才訳　一九三〇年五月二五日初版　上海、辛墾書店発行　目次二頁　本文一三八頁　「校正の後の附記」三頁　一九三〇年一二月二五日再版　初版一五〇〇部　再版一五〇〇部発行

「校正の後の附記」の和訳をつぎに掲げる。

本書は河上肇氏の編訳になる〝マルクス主義叢書〟

6 資本主義経済学の史的発展

一九二三（大正一二）年八月二〇日、弘文堂書房発行。菊判、要目、細目一六頁、本文六二五頁、挿画一二枚。一九二五年一月二五日発行の第二十一版に、「第二十一版の発行に際して」と「（附録第二）個人主義的社会組織の極度なる発展階段としての資本主義的社会」を新たに加えた。

⑨ 資本主義経済学之史的発展

林植夫訳　一九二八年三月初版　上海、商務印書館発行　総目一頁　細目一五頁　挿画目次一頁　本文頁数未詳　定価大洋二元五角

本訳書は原書第二十一版（改訂本）以前の版を底本としている。「経済叢書」シリーズの一冊として刊行され、同叢書は、ほかにボグダノフ著（周仏海訳）

第一冊から重訳した。それによると、この書は一九二五年七月刊行のドイツ語版『マルクス主義の旗の下に』（Unter dem Banner des Marxismus）第一巻第二号に発表された以下の三篇、

A. Deborin, Lenin als revolutionärer Dialektiker. (SS. 201－230)

A. Deborin, Lenin über Dialektik (SS. 403－411)

W. I. Lenin. Zur Frage der Dialektik (SS. 412－416)

の翻訳より成る。私は、このような書が中国ではまだ大いに必要だと考えたので、訳出したのである。

私は、平易さばかりを求める翻訳法をあえてとらなかったために、やむなく頑なまでに直訳に固執した。第一篇は逐語的に訳したと言えよう。第二篇は、別のノートをところどころ参照して訳してみたが、特に大きな変更はしなかった。ただ最後の一篇だけは、山川均氏が訳したイリッチの『唯物論と経験批判論』中の当該篇を全面的に参照して訳出したため、あるいは若干の相違が生じたかもしれない。書中の固有名詞はテキストどおりに表記したが、ただ最も通俗的ないくつかの名称については、訳者自身の判断できめた。各章の表題については、あればやはり読者に便宜であろうと思い、訳者が強いて付け加えたものである。

イリッチはマルクス主義の唯一の真の継承者であり、マルクス主義の弁証法もまた彼の手中におさまるや、あたかもマルクス主義が彼の手中におさまった場合と同様に、たちまちその実践性と闘争性を強化した。したがって、イリッチの弁証法は、単に唯物的であるだけではなく、闘争的でもある。現在はすべてが積極的に闘争しなければならない時であるようだ。私は、闘争を必要とし、あるいは今まさに闘争しつつあるすべての人々に対し、本書を武器として献呈する。

私は当初、本書の姉妹篇として『戦闘的唯物論者 ―イリッチ』をひき続き訳すつもりであった。この書もまたデボーリンの有名な著作であり、今日多くのおもだった国では訳本が出ている。ところが幸いなことに、韋慎君が原文に基づきながら、同時に独文を参照して当書を訳出された。聞くところによれば、秋陽書店から出版されるとのことである。本書を興味をもって読まれた方々は、合わせてそちらもご覧いただきたい。同時に、私が作者を侮辱し読者を欺いた罪を、読者が

軽減して下さることを希望する。善意の御叱正には、私はいつも心から感謝している。

メイデイ　訳者

初版を中央編訳局、再版を上海図書館が所蔵する。

8　階級闘争の必然性と其の必然的転化

一九二六（大正一五）年四月一〇日、弘文堂書房発行。四六判　序二頁　本文八四頁。マルキシズム叢書第三冊。一九二九年六月一日『階級闘争の必然性及びその必然的転化』と改題して共生閣より発行（本文に変更はない）。

⑪　無産階級運動

訳者名記載せず　一九二七年五月初版　上海、新華書局発行　本文三〇頁　定価大洋二角

原著者名も訳者名も示さず、原序の訳も付さない本訳書表紙の表題「無産階級運動」だが、本文の表題は「階級闘争的必然性」。

京大経済学部河上肇文庫が所蔵し、表紙に河上肇のペン書き自筆で、「階級闘争の必然性とその必然的転化」の翻訳也「昭和二年七月入手」としるされている。

⑫　社会変革底必然性

沈綺雨訳　一九二八年一〇月二〇日初版　上海、創造社出版部発行　目次一頁　原序二頁　本文六九頁　定価大洋一角半　再版一九二九年四月一〇日発行　初版一五〇〇部　再版一五〇〇部発行

原書には章立てはないが、本訳書では全体を八章に分かち、それぞれに表題を付している。

再版を北京図書館が所蔵する。

⑬　進化論与階級問題

陳宝驊・邢墨卿編訳　薩孟武校閲　一九二九年一一月一〇日初版　上海、新生命書局発行　序一頁　目次二頁　本文一二六頁　定価三角

本訳書の上篇はパネコック　A. Pannekock　の『社会主義と進化論』（Marxism and Darwinism）の翻訳、下篇が河上肇の『階級闘争の必然性と其の必然的転化』の翻訳で、下篇の表題は「階級闘争の発展」となっている。

訳者の「序」の和訳をつぎに掲げる。

「この小冊子は二つの名著の合冊から成る。一つはパネコックが著わした『社会主義と進化論』、一つは河上肇が著わした『階級闘争の必然性と其の必然的転化』である。前者は、マルクス学説とダーウィン学説の関係を解説し、後者は、階級闘争がいかにして発生

し、いかにして日ごと激烈になっていっているかを解説している。

ここで一言おことわりしておかなければならない。前書は、もとより逐語的に翻訳したが、後書の方は簡潔で読みやすいことを宗としたために、冗長なところはおおむね削除した。しかし、それが決して全体の論旨をさまたげるようなものでないことは、訳者が保証する。

最後に、訳者は薩孟武先生に十二分に感謝申し上げたい。先生はご多忙のさなかに訳稿を慎重にご校閲下さり、本書を完璧精確な書にして下さった。とくにこの序言のなかに記して謝意を表する次第である。

十八年十一月一日　　訳者

初版を上海図書館、北京図書館が所蔵する。

9　人口問題批判

一九二七（昭和二）年二月一四日、叢文閣発行。四六判　例言二頁　目次一頁　本文六四頁。

⑭　人口問題批評　附馬爾撒斯人口論概要

丁振一訳　一九二九年四月二五日初版　上海南強書局発行　目次二頁　訳序二頁　本文五六頁　定価二角

本訳書は、原著の「人口問題批判拾遺」を省略し、かわりに訳者による「マルサス人口論の概要」を加えている。

「訳序」の和訳をつぎに掲げる。

「マルサスの『人口論』が出て一世を風靡して以来、世の人口問題を論ずるものは、誰もがこれを規範としてあがめた。その説というのは、食物の生産増加の比率は、人口繁殖の比率の速度には遠く及ばず、しかも土地の面積は限りがあるが、人類の生殖は果てしないものであるから、人類の生活の困難と窮乏は当然生じる現象で、避けられないものであり、これを避けようとすればただ人口の生産を抑制するしかない、というものである。この説は、一般人、資本家および資本主義弁護論者たちからたいへん歓迎された。概して、一般の人が見たり聞いたりするのは、ただ生活難の現象だけであって、その真理の所在までは明らかではない。だから、一たび誰かが、食物と人口の増加比率の遅速や、土地面積は有限だが人類の生殖は果てしがない、といった理論を指し示せば、それは正に通俗の観察にぴたりと当てはまり、当然そうなるべきことと信じて疑わない。資本家およびその弁護論者たちときては、人類の生活難によって、その根本が動揺させられるこ

とを恐れていたが、今やマルサス氏の説を得て、消極的には資本主義の存在を弁護することができ、（「生活難は当然起ることで避けられない」と言うのだから）、そのうえ積極的には資本家が人民を鼓舞してほしいままに侵略を行う機会を与えた（「土地の面積は有限だが人類の繁殖は果てしがない」というのだから）。かくしてマルサス氏の説は、資本家およびその弁護論者の信奉するところとなった。しかし、科学は日に日に隆盛になってきて、世間の人の目をごまかす通俗論は次第に見破られるにいたった。そして人口問題の真理は、雲霧が払われて青空が望めるようにはっきりしてきた。

日本の社会主義経済学者河上肇博士が刊行した著作『人口問題批判』は、この問題に極めて詳細に論及しており、一般人および資本主義経済学者の人口問題の観察並びに主張に対して、完膚なきまでに批判を加え、あわせて人口問題の真理と問題のネックを明らかにして、徹底的な解決策を追求された。この書が世に出て、まる一月もたたないうちに一〇版を重ねたのも、同書の価値を証明するに十分であろう。特にこれを訳して国民の要望に応える次第である。

初版を北京大学図書館、北京図書館が所蔵する。

記念会報を読み返して

この夏、少し時間があったので、細川氏より第一号からの会報を借り受け（私の所持するのは十二号からなので）、全部読み返しました。時々メモ等もしたので二日間の夏休みはこの会報に費されたことになります。折角ですので、メモしたこと・感じたことをまとめてみました。

㈠会報発行回数

一九七二年　遺品保存委員会が「河上肇記念会」に改称

一九七五年　創刊号（一回）八ページ

七六年　〇回

七七年　四回　　平均一六ページ

七八年　二回　　一一ページ

七九年　一回　　一〇ページ

八〇年　〇回

一九八一年　二回　　一六ページ

八二年　二回　　一八ページ

八三年　三回　　一七ページ

八四年　三回　　一七ページ

八五年　三回　　三三ページ

八六年　三回　　四七ページ

八七年　今回を含めて四回

七八年から八十年にかけて会報発行はやや停滞したが、これは記念会活動の停滞ではなく、生誕百年記念行事に事務局が忙殺された為でしょう。しかし今となればその頃の様子が記憶に頼る以外にないというのは残念に思われます。その後は事務局体制が整ってきたのでしょう、かなり定期的に発行されるようになり、二十号（八五年十月）から従来のB五版の大きさから現在のA五版に移行し、年三回発行とともにページ数も増加して来ていま

す。先輩事務局のご苦労に敬意を表します。

この頃より会費納入状況も大幅に改善され、先生方の原稿とともに会員の寄稿・通信が増加しました。この実績の上に今年は念願の年四回発行―季刊誌へと事務局はすこし頑張りました。来年以降もこの季刊体制が維持できるかは自信がありません。会員各位の積極的なご協力に期待いたします。

㈡七号（一九七八年十月）の編集後記に「編集部からの三つのお願い」があります。採録します。

『・「えらい人がたくさんおられる会だから、私などははずかしくて書けない」と言われないような誌面にしたい。

・「明治の人が多いから、われわれ若造は発言しにくい」と言われないような誌面にしたい。

・「河上肇に対するファン意識が強すぎて、なかなかとけこめない」と言われないような誌面にしたい。

御協力をお願いします。』

十年が経過しましたが、先達の達観に再び敬意を表わすとともに、気持ちを新たにしました。またそうでないと昭和二けた生まれで偉くもない私など、とても事務局のお手伝いなどできません。

㈢九号（八一年二月）まで「会の財政と会費納入のお願い」の記事が度々掲載されています。その成果か、あるいは生誕百年の諸行事が会員に訴えたのか多少改善された模様で、十四号（八三年五月）の「当番日誌」は言っています。「会員の方々が会費を送って下さったり、寄付をしていただいたお陰で会報十四号が出せました。借金をしないで胸を張ってお配り出来る久々の会報です。事務局の一員として、しあわせ感一杯です。」

また八六年度の総会での大門事務局長の報告はこうです。「私どもの河上肇記念会は皆さんから会費をいただいて成立しているわけでございますが、八六年度の会費をいただいた方が私の計算では、驚くなかれ四四七名おられます。一人三千円ずつですから約百五十万円の収入になります。（中略）今期やっと四四七名という好成績を収め、ようやく去年あたりから自前で運営することができるようになりました。まことにありがとうございます。ただし今年は四十年記念として大分費用が要りましたので、ただいまのところ余り残っておりません。実際、自前で運営できましたのは二・三年前からのことでございまして、今後ともよろしくご協力願いたいと思います。」

しかしそれ以前の借入金（これは多分大門さんからの

ものでしょう）が、これが完済されたのか否か私は知りません。ただ四十年記念集会も運転資金が不足したのが実情です。また二年後の生誕百十年の諸行事、その他の催しを行うとすれば、若干の資金計画の確立が必要でしょう。私見としてその対策は、

・会員増
・会費完納とカンパ
・会費値上げ

の三案しかなかろうと思います。

(四)記念会発足当時の年会費は千二百円。七七年度より三千円で、それ以降は据え置きです。当時はハガキ代が二十円であったことから考えても、しかも会則にもある通り「この会の経費は、会員の会費ならびに寄付金をもってあてる」のですから、ボツボツ会費再検討の時期かと思われます。（しかし私自身は会費値上げには極力反対です）

(五)若い人対策

「明治生まれの人が多い」・「老人の集会か」・「若い会員が少ない」の声はそれこそ何度もあちこちに出て来ます。そしてそれなりの対策もとられました。一時は京大経済学部学生会や河上祭実行委員会の学生と提携したり、学生が総会の司会を担当したこともあったようですが、十二号（八二年十月）の記事を最後に、それ以後河上祭の記事がありません。二十号（八五年）の「世話人会議摘要」では「若い会員」対策が世話人会で話合われた記事もあり、事務局会議でもしばしば話題に出ます。しかし顕著な成果は見えないというのが実情です。

そこで提案ですが、生誕百十年を間近に控えた今、いろいろの行事が企画されるでしょうが、その準備の一年として「会員一人一人が若い会員を一人増やす」というのはいかがでしょうか。テレビより、本より、やはり一人一人の熱い呼びかけが最も説得力があると思いますが、いかがでしょう？

(六)会員の「河上肇」観

一号から二十六号まで全部読み返すのは、正直に言えばやや疲れました。全部で約六百ページ。時々メモしたり、あれこれ感慨もあって、結構時間がかかりました。しかしどれもこれも勉強になりました。とりわけ私が感銘を覚えたのは四号（七七年十月）の『特集、各世代の「私と河上肇」』です。十七歳から九十一歳まで男女各層の二十一人の方が書いておられる。そのほとんどが河上とは直接関係のない人ですが、それぞれに河上との出

会い・河上への想い・河上を通して自己との対話を語っておられます。

また他方、素人の河上論・河上観を期待する会員通信も多く、これに対応して事務局もそれこそ何度も会員の投稿を呼び掛けていますが、その結果は残念ながら発見できません。

河上の教えを受けた・河上と同時代に生きてその言動や著書に直接の影響を受けたという会員は減少しつつあります。そうではなくて諸々の著書を通じての・歴史の中の河上に関心や魅力を覚える会員が増加しつつあります。記念会の存続発展をおもう時、それは当然の流れでもありましょう。この会員の質的変化を考慮すれば新しい河上肇観がこの会報に展開されてしかるべきものと思います。会員の「河上肇と私」はぜひ継続したいと思います。積極的なご投稿を期待しております。

しかしこのように書いてきて私の一番懸念することはこんなことです。「会費を値上げしてはどうか」・「若い会員を増やそう」・「原稿を書いて下さい」の提言。「自分は黙って会費を納入しているのに、この上こんなことを要求されるのならやめる」とおっしゃる方が居られないかということです。記念会をおもう若さと情熱が言わせたこととご勘弁下さい。

（事務局　紀平龍雄）

編集後記

一九八七年も残り少なくなりました。本会報年四回刊行にともかくこぎつけましたが、皆さんにおとどけするのは新年になってしまいました。

本号は、「河上肇と私」の寄稿を特集の第一回として組みました。この企画が事務局若手の紀平氏の尽力により復活したことに感謝するとともに特集が継続するよう会員の皆さんのご寄稿をお願い致します。杉原、一海、米浜各先生の連載もの、ますます興味深く、しかも学術的価値があり、本誌のステータスを高めることでしょう。

船山信一先生のご労作『河上肇の哲学』が編集子に恵贈されました。哲学の分野で河上を位置づけるご努力を拝読しましたが、今だ素人紹介文がものになっていません。つづいて音読会でおあいした佐藤武義さんの『議員女房』をいただきました。同世代の「自伝」として面白く拝読しました。最後の章には佐藤さんの音読会を通じての河上への勉強ぶりが記録されています。（細川　記）

会員通信〔一〕

まず始めにお詫びいたします。総会案内の会報二七号一八ページ藤谷謙二氏の通信、事務局の整理誤りにつき全文削除願います。御迷惑をおかけしました同氏に深くお詫びいたします。

この号の編集後記に「是非通信を下さい、会報充実のために」とお願いしましたところ、たくさん書いていただきました。ありがとうございます。誌面の都合で㈠のみとなりましたが、引き続き次号の「総会特集」にすべてを掲載しようと思います。

（事務局　紀平龍雄）

会報と総会御案内ありがとうございました。本年も法然院詣でが出来る事、ありがたく感謝の想いを深くして待っております。よろしくお願い申し上げます。

福岡市　**麻生泰一**

ご連絡、いつものことながら誠に有難く厚く御礼申し上げます。会報も益々充実し事務局の皆様のご貢献こそ特筆されるべきかと存じます。多忙な仕事をしておりますので当日の出欠は未定ですが、できる限り努力致します。

京都市　**池上惇**

貴重な誌面を広告にかえて申訳ありませんが、シンドイので九月三十日を以て耳鼻科医者を閉業いたしました。羽村様・塩田様始め皆様に御贔屓に相成り有難うございました。しかしあと暫くは会員を続けられるつもりです。年賀状は失礼いたします。

京都市　**稲田素臣**

小生最近河上肇先生自作自筆「洛北法然院十韻」色紙入手しました。此の色紙には右詩を記し、その末尾に「洛北法然院十韻　壬午三月四日遊后三日定稿　河上肇」とあり「閉戸閑人」の朱印が押捺してあります。

豊中市　**井関安治**

今回は是非出席させていただき度いと存じております。

東京都　**内海庫一郎**

色々と御苦労様です。弟と二人参

加しますが、会費は当日に支払い致しますのでよろしく。

高槻市　**上野達也**

第八期河上肇音読会は十月十六日（金）開講。毎月第三金曜日午後六時半より京都教育文化センター（京大病院前、春日通り側）にて、杉原先生編「河上肇評論集」を音読します。音読のあと講師の先生のお話を聞きます。テーマは経済学・婦人問題・宗教観等幅広く話していただきます。皆様のご参加をお待ちしています。詳しくは電話〇七五―七七一―四四八六（宮本方）まで。

寝屋川市　**沖本彰**

細迫朝夫氏の「新労農党と河上肇」のご講演を楽しみにしています。住谷悦治先生著「人物叢書河上肇」を拝見致しました（吉川弘文館）。立派な本で河上先生を理解するに手頃なものだと思いましたので参考までに書かせて頂きました。

堺市　**小田正大**

故河上先生の墓参に今年は是非行きたいと思います。（ただ最近、退院したばかりですので、次回診察日の結果によります。）近頃少しヒマを見て蔵書を整理していましたら、河上著「マルクス経済学」（改造文庫　定価三十銭　昭和五年）が見つかりました。やはり先生の名著の一つであろうと考えます。香川県での大山郁夫氏の選挙演説に行った時の事も書かれてあり、大変感銘を新たにしました。

東京都　**亀山幸三**

また病気にやられて入院の結果、今度も駄目かと思っていた処、案外早く退院できました。しかし京都まではむずかしそうで無念でたまりませんでした。然し先日新聞に二高の大先輩の住谷悦治さん死去の記事を目にし、急に力が出て立ち上がれるようになりました。娘と相談の結果、出席いたします。

伊那市　**北原邁**

丁度六年間、京都を離れておりました。一度法然院へと思いながら所用にかまけそのままになっております。これを機会にまいりたいと思っております。

京都市　**京藤英一郎**

先日の打ち合わせに従って当日はできるだけ早めに会場入りできるよう努力します。

羽曳野市　**小嶋康生**

ながらく出席していないので今年はと思っていましたら当日差支えることが起こり本年もあきらめようと心に決めていました。ところが昨日大門英太郎兄に会って、十月十八日にはどんなことがあっても法然院に出かけようと決心しました。

吹田市　小林　覚

総会当日には法然院にも錦繡の帳が彩色を深める事と存じますが、諸先輩の有意義な話を拝聴出来る事を楽しみに致して居ります。数年前、京大経済学部の後輩で河上肇と同じ山口高校出身のO君にこの会の存在を報らされ直ちに入会申込、始めて総会に参加した折は未知の方ばかりでいささか気疲れ致しました。（中略）桜美林大学の佐藤克己先生の著書、「孤鴻万里」・「総合科学への道」も興味深く拝読させて戴くことが出来ました。愚見にて恐縮ですが先生を総会の講師として「河上肇と陽明学」（仮題）を企画して戴ければ幸甚に存じます。

枚方市　佐田季男

さわやかな秋の訪れに心をはずませております。秋の京都にひたってみたいものと思っております。が、知人の体調すぐれず、何か不安を覚えておりますが、今年こそ是非うかがい、お話をききたいものと思っております。

伊東市　白石美智子

はじめから奉る河上先生でなく、めいめいの暮らしの思想形成の中で思いあたり、みずからが把握しなおしてゆく河上像に気づく昨今です。

向日市　寿岳章子

出席したいのですが、その頃の体調・天候の状況などで出席できるかどうかわかりません。行楽シーズンの日曜日の交通機関の混雑を思うだけでも足がすくみます。

西宮市　杉原四郎

いつのまにか秋の一日のこの会が予定の中に入ってしまいました。存知あげます方は誰もいらっしゃらないのですが、おまいりのあと夕方のあの辺り一帯歩きますのがたのしみでございます。法然院の和尚様の美声のお経を聞かせて頂くたのしみも。

神戸市　曽我まり

お世話様になります。老人二人何とか無事に過ごして居ります。当日は私だけ出席させて頂きます。

京都市　羽村しづ

敬愛する河上先生の墓前にその御人柄を追慕する方々と一緒に御参りできる幸せを深く感じ入っています。

神戸市　葉抱武三郎

毎度お世話になり有難うございます。本年の総会は是非出席致します。宜しくお願い申し上げます。

吹田市　長谷川俊雄

いろいろとお世話を賜り誠に有難うございます。皆々様の御健康のほどお祈り申し上げます。

堺市　広岡正次

小生宿痾に悩み、退院後も好不調の波あり、是非出席して諸賢の御高説拝聴の希望ですが、或は不参となるやも知れず、その節は事前にご連絡の所存であります。

河内長野市　藤木福太郎

八十年に京都→広島へ移住しまして以来、一度出席しましたが、どうも足が遠くて欠席が続いています。京都在住の友人の再三に渉るすすめもあり、今回は出席することにしました。

三原市　福島史郎

久しくごぶさたしていますが各位それぞれ河上先生の研究にとりくんでおられ、敬意を表します。核兵器廃絶運動に手をとられて失礼をしていますが、ヒロシマ・ナガサキ・アピール署名運動に若干の前進があり、これが更にすすめば前途を危惧することなく研究できるようになると存じます。河上先生もそのような世界の現実・日本の現実を心配しておられた気が致しまして、研究を後回しにすることは間違っていると思う次第です。総会は期待できるものとなるでしょう。

京都市　細井友晋

総会に初めて参加させていただきます。昨年と同様、少しばかりですが、収穫したりんごを会に間に合う様に送ります。

長野県北佐久郡　両角康則

昨年の会には義父の事をお話させて頂ける機会を御配慮賜り改めて厚く御礼申し上げます。今年は続けて出席させて頂く予定です。

京都市　森田茂

広島県三原市在住の友人を誘っておりましたので返信が遅れました。ことしは二人で参加します。楽しみにしております。

京都市　山崎利一

転居通知のお願い

転居、住居表示変更などのあった場合は
事務局へご一報下さい。

〒五四二　大阪市南区島ノ内一―二〇―一九
（丸善石油ビル）　千代田商事株式会社内
河上肇記念会

貧乏物語　初版

〒 542
大阪市南区島ノ内一―二〇―一九（丸善石油ビル）
千代田商事内　河上肇記念会
電話　（〇六）二五二―三六九六
振替口座　大阪　三一三一九五

京都（きょう）に〝煙〟あり

1965年 創刊　只今50号

戦前日本プロレタリア文化運動の生き残り10名（74～84才）が出している異色の同人誌。語り部として戦前活動家の埋もれた青春像の発掘を柱に「煙」を編集・発行する一面、同時に戦後への架け橋たらんとしてもいます。

A5版 120頁 頒価 500円 〒200円

「煙」　同人社

京都市中京区西ノ京藤ノ木町11の24
児玉　誠方
電話　京都（075）811－7646番
振替　京都　2－15653番